



俺<sup>ちが</sup>

のことが

好きだな

幼馴染に

中出し

してみた



ほんとに  
昨日のことだったのか……

俺は昨日まみと……  
初めてエッチなことをした……

最初は予習の……  
はずだったのに……

もうこれから  
どんな顔して……  
会えばいいんだよ……




うわ、思い出したら……  
顔熱っ……



まなと……  
キスして、触れて……

でもあの頃は——



あの頃はただ一緒に  
歩けるだけで嬉しかった

まなはいつも無表情だったけど  
俺の手はしっかり握ってくれてた

「今日も隣にいてくれる」  
それが、何よりの安心だった



まなを意識すると  
股が勝手に反応してしまう

やめてくれよ  
そんな顔……

恥ずかしいのにそれを  
見透かすようにまなは少し笑ってた

びしょ濡れの制服越しに  
まなの肌が透けて見えて

見ちゃいけない  
でも見てしまう

まなは何も言わずただ前を見ていた  
バレそうでドキドキした






あの日は…  
一瞬何が起きたのか…  
わからなかった

気づいたときには  
まなが俺の前に立ってた

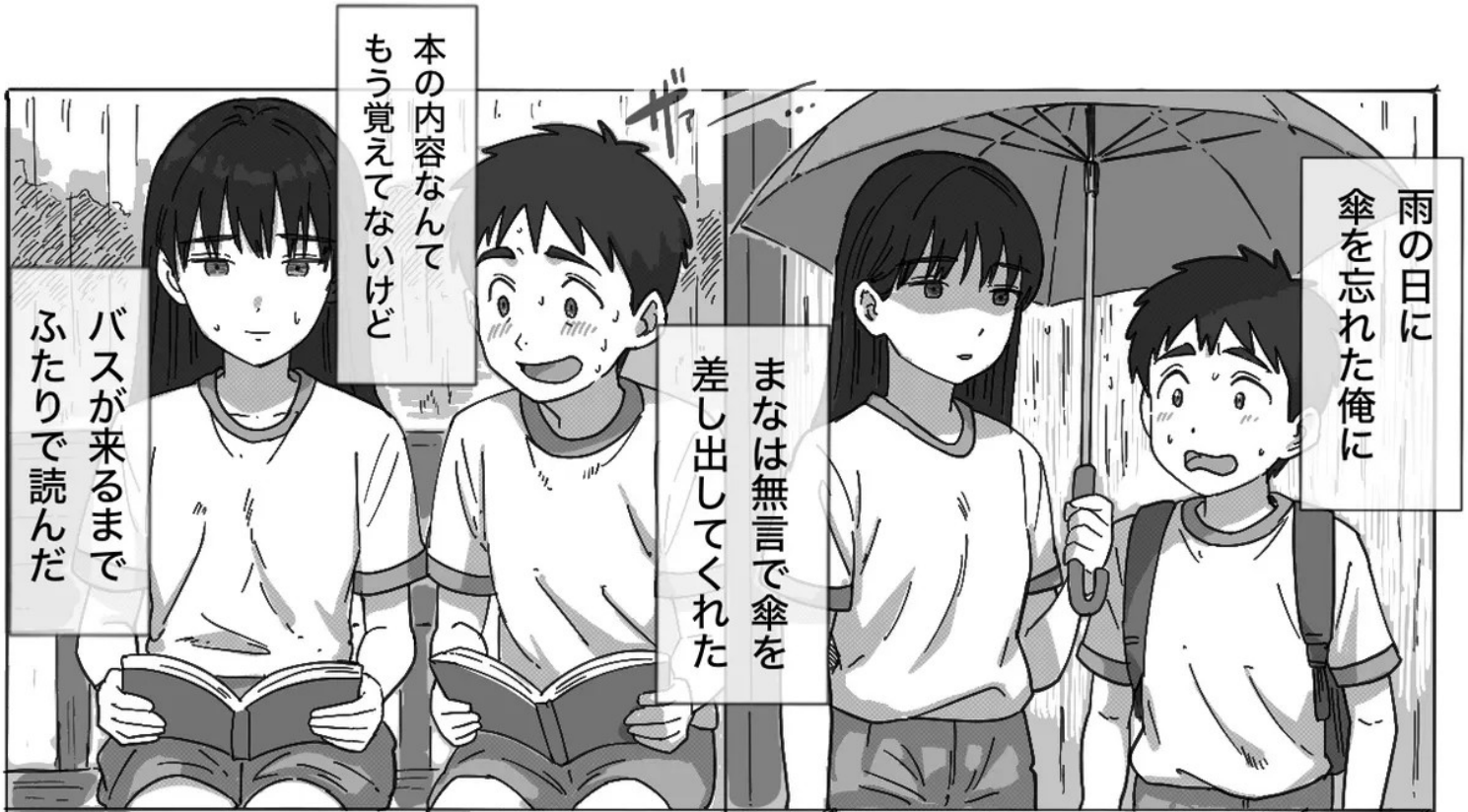
守られてたのは  
俺の方だった


その事実が、妙に悔しくて  
でもちよっとだけ…嬉しかった



どうしてあの時あんなに  
自然と接することができたんだろう

今は俺が緊張してままと  
まともに話せないと言っのた...





中学の頃みたいに  
もう手は繋がなくなつた

何となくお互いが少しだけ  
意識してるのかもしれない

昔よりも話すことは  
減つたのになぜか  
不思議と落ち着く

昔と変わらないはずの日常  
だけど今はまなの…  
顔が直視できなかった

昨日の初めてのエッチを  
思い出すたびに  
ちんぽが騒がしくなる

たぶん、まなも…  
同じだったと思う

手を伸ばせば届く距離  
でも、今日はなんだか遠かった

それでも—  
まな、やっぱり君のことが—

放課後の静けさが染みついた更衣室  
汗と柔軟剤の匂いが漂うなか

まなは静かに隅で隠れてた

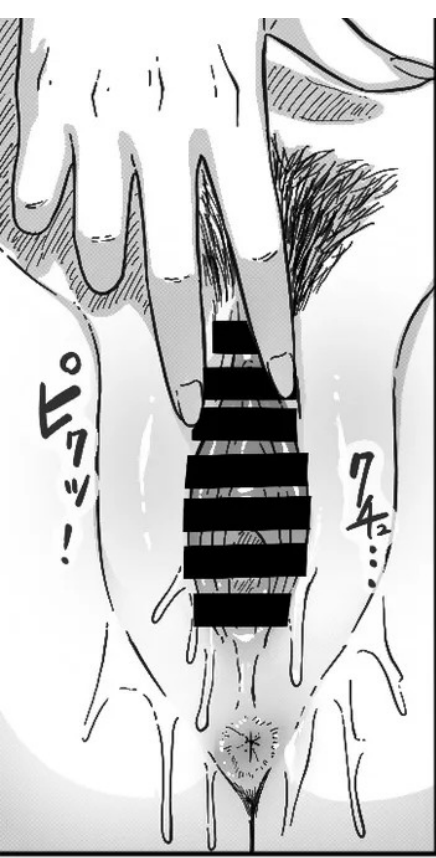
あの夜、彼が…  
眠ってしまった際に—

指が勝手に  
シャッターを押していた

これ、バシたら…  
でも…







ふたりの会話も  
気配もすべてが遠くなる

駿のことしか  
頭になかったか

カーテンの奥で  
ひとり達した少女は――

その罪悪感すらも  
快感に溶かしていく

誰かいる？

なんか……  
やっぱ出よっか

空いてるとこ使お

ビクッ  
ビクッ

ビクッ  
ビクッ

ビクッ  
ビクッ

ビュビュッ!!

ヌキ  
ヌキ

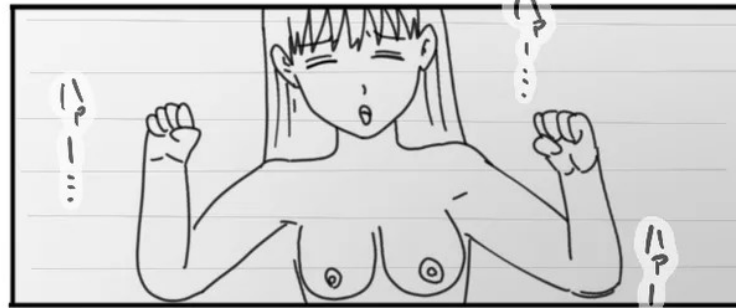
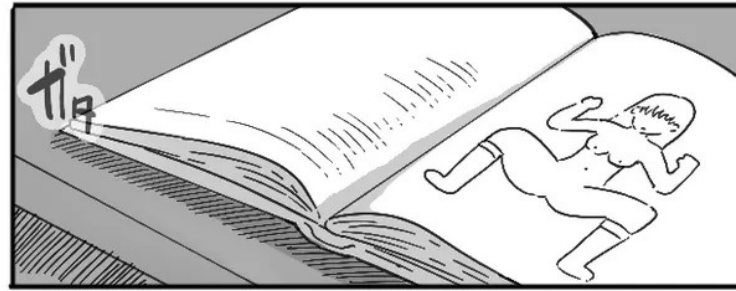
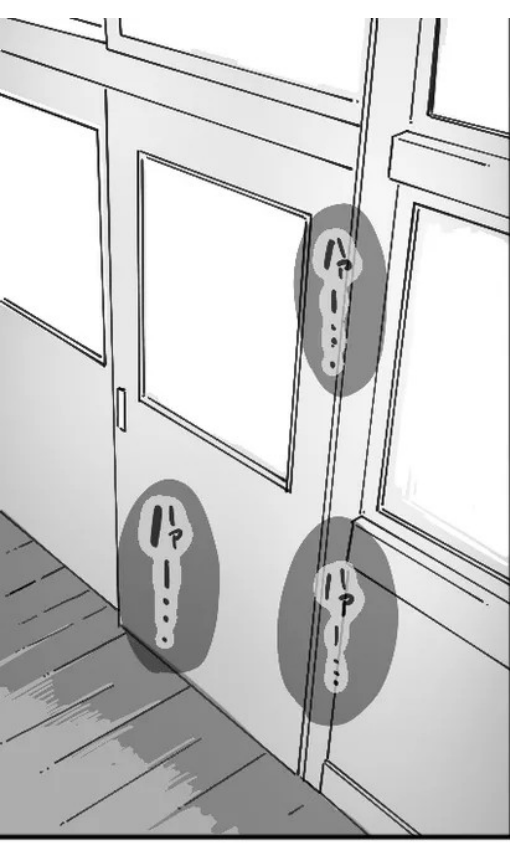
ヌキ  
ヌキ

ハッ……

?

ハッ……

ビクッ  
ビクッ





それだけでどうしようも  
なくなってしまう

思い出すのは  
まなの顔、声、感触…



言葉はいらなかった



ドキ

ドキ



心が前へ進んだ



ドキ



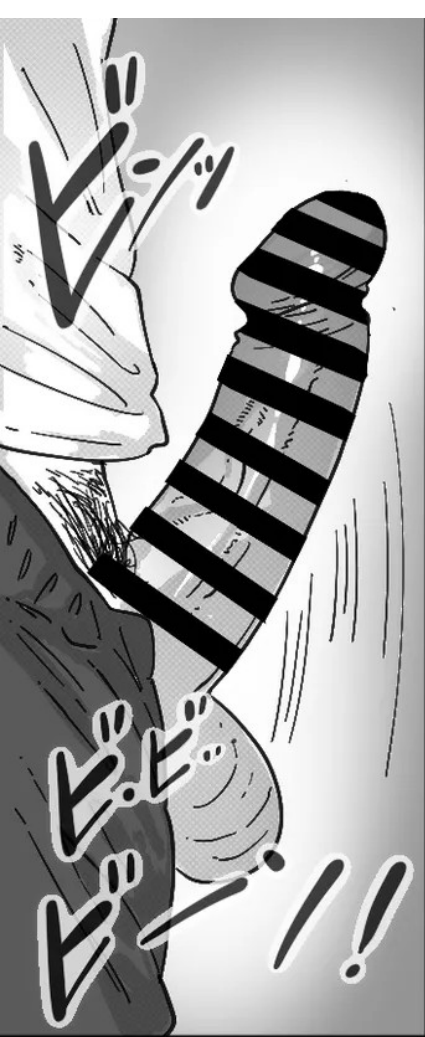
行こう……



ただ目が合った瞬間



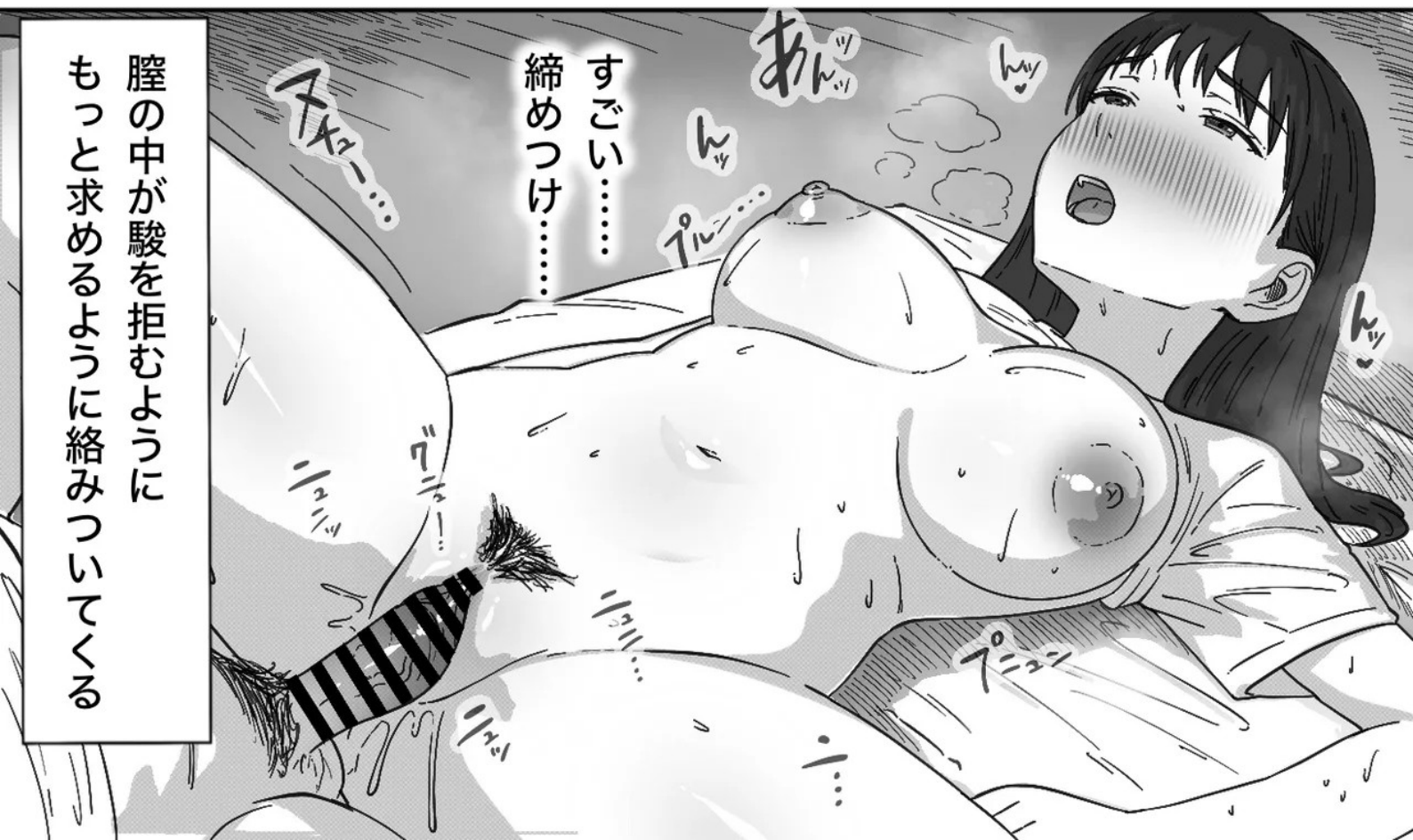
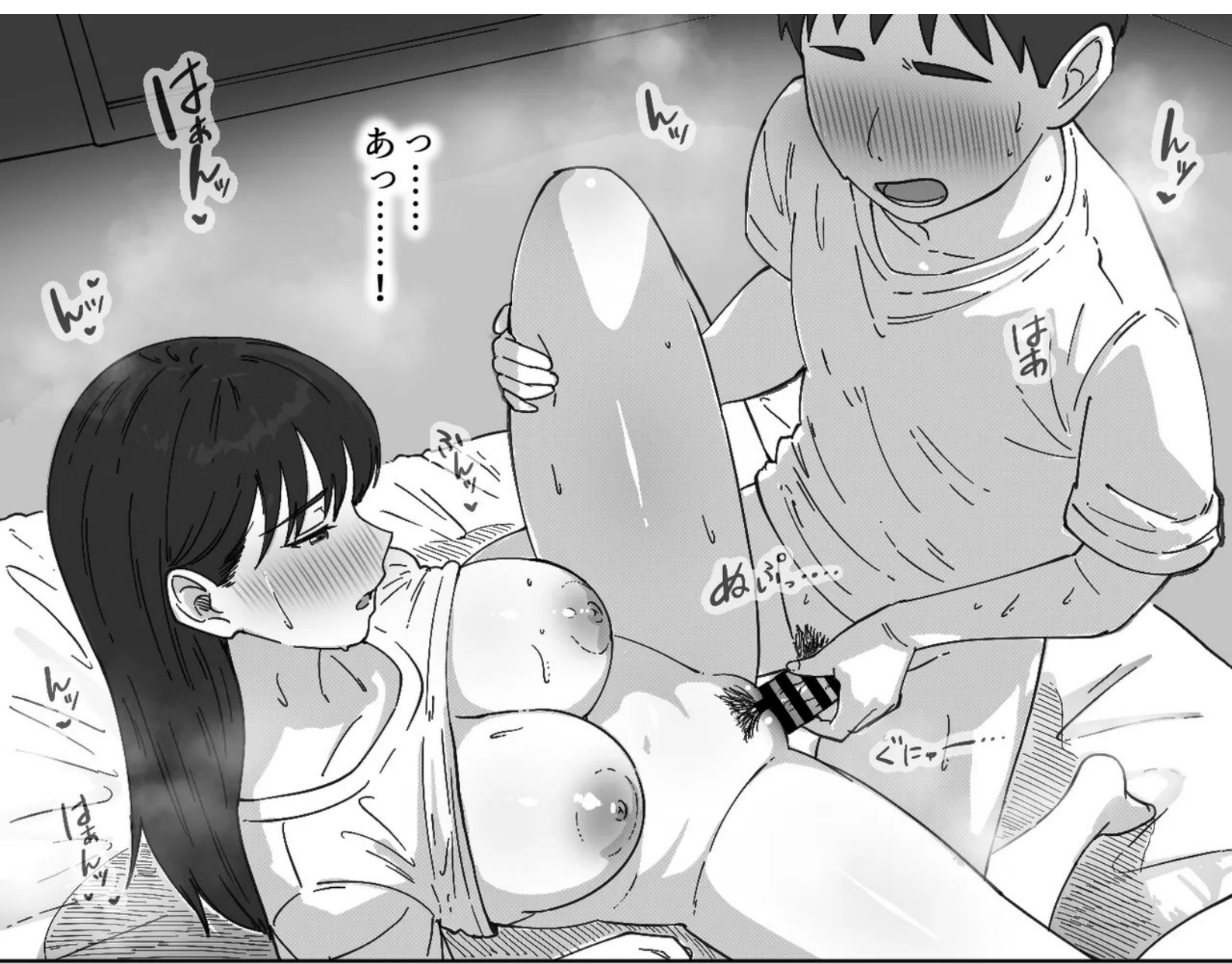
ふたりだけの…  
逃げ場のない  
空間が完成した











膣の中が駿を拒むように  
もっと求めるように絡みついてくる









FIN

